

\*パウロは14年ぶりにエルサレムにバルナバとテトスを連れて上った。その理由は、使徒15章にあるとおりである。「さて、ある人々がユダヤから下って来て、兄弟たちに、『モーセの慣習に従って割礼を受けなければ、あなたがたは救われない』と教えていた。そしてパウロやバルナバと彼らとの間に激しい対立と論争が生じたので、パウロとバルナバと、その仲間のうちの幾人かが、この問題について使徒たちや長老たちと話し合うために、エルサレムに上ることになった。」  
(使徒15 : 1~2)

\*ナザレのイエスが待ち望んでいたメシヤ、救い主であることをたとえ信じることができても、ユダヤ人たちは長い間律法に縛られた日常生活を急に急に変えることは難しいだろう。特に「割礼」は神様との契約のしるしであるから、ないがしろにすることができなかった。私たち日本人が日本の宗教的習俗、習慣に染まった者がクリスチャンになるとたんにそれらすべてを捨てたりすることが難しいことを考えてもわかる。しかし、パウロは、イスラエルの民がクリスチャンになっても割礼をすることを否定していない。パウロ自身も割礼を受けた者であった。彼は異邦人にもユダヤ人にも同じようにイエス・キリストによって救いが来ていることを知らせ、全ての民が救われて欲しい。そのためには割礼はあってもなくてもよいと考えていた。救われるためにはユダヤ人になれとは言えないし、なる必要もないのである。

\*いわゆる「エルサレム会議」で、このことが話し合われ、ペテロやヤコブ、ヨハネと合意が得られたのである。「そのおもだった人たちは、私に対して、何もつけ加えることをしませんでした。それどころか、ペテロが割礼を受けた者への福音をゆだねられているように、私が割礼を受けない者への福音をゆだねられていることを理解してくれました。ペテロにみわざをなして、割礼を受けた者への使徒となさった方が、私にもみわざをなして、異邦人への使徒としてくださったのです。」(ガラテヤ2 : 6~8) 福音は一つ。だれでもイエス・キリストの十字架によって贖われ、救われるという福音である。パウロもペテロもこの同じ福音を伝えるために同じ方、主から召しを受け、働きかけられたのである。「律法を持たない人々に対しては、——私は神の律法の外にある者ではなく、キリストの律法を守る者ですが——律法を持たない者のようになりました。それは律法を持たない人々を獲得するためです。弱い人々には、弱い者になりました。弱い人々を獲得するためです。すべての人に、すべてのものとなりました。それは、何とかして、幾人かでも救うためです。私はすべてのことを、福音のためにしています。それは、私も福音の恵みをもとに受ける者となるためなのです。」(1コリント9 : 21~23) 福音は同じであるが、宣教の相手や方法は違う。信仰や救いの本質に触れることについては決して譲らないが、それからはずれていることについては寛容に取り扱うことが必要ではないだろうか。